様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２３ 日現在

機関番号：４２６７６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０５５

研究課題名（和文）欧米との比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of images of death which were represented in modern Japanese literature and film in comparison with the West

研究代表者
城殿　智行（KIDONO, Tomoyuki）

大妻女子大学短期大学部・国文科・准教授

研究者番号：００３４１９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：　日本近代文学及び映画において、死の表象がどのように生産され、社会に流通してきたのかを、欧米との理論的・歴史的な対比において明らかにすることで、実際には思考することも表象することも不可能な「死」といった超越的な審級を、文学及び映画がいかに経験論的な次元へ導入しようと試みてきたのか、その言語的・視覚的な思考の臨界におけるイメージ形成の分析を行い、臨床の場で発達してきた死生学に、学際的な表象分析の観点を付け加えた。

研究成果の概要（英文）：The aim of our research was to clarify how death has been represented in modern Japanese literature and film in comparison with the West. Indeed, death is a transcendental phenomenon. Strictly speaking, no one can think about it or even represent it. But there were many attempts to capture the true image of death in modern Japanese literature and film. Our research added how to analyze such images of death to thanatology as an interdisciplinary study.

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：3101

キーワード：日本近代文学　映画　死生学　表象

１．研究開始当初の背景

(1)　近代における死生観の形成をめぐって思考した人文科学系の先駆的な成果としては、何よりもまず、Ｍ・ハイデガーの『存在と時間』(“Sein und Zeit”1927、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994 年）が挙げられるべきである。ハイデガーは死そのものの思考(不)可能性をめぐる哲学的な基調を形づくり、それ以後に書かれた死をめぐる哲学的・思想的な著作で主だったものは、サルトル、ガダマー、デリダ等だけでなく、ハイデガーの語る「本来性」に対して強く異議を唱えるレヴィナスやラクー＝ラバルトとナンシーでさえ、概ねハイデガーの問題圏にあったといえる。

実存主義的な観点に基づく著作以外では、Ｖ・ジャンケレヴィッチ『死』(“La Mort”1966、仲澤紀雄訳、みすず書房、1978 年）が相対的に重要であった。

また、死及び死生観の歴史的な分析として規範となるのは、Ｐ・アリエスの『死を前にした人間』(“L’Homme devant la mort”1977、成瀬駒男訳、みすず書房、1990 年）及びそれに付随する同著『死と歴史』、『図説　死の文化史』(後述)であった。

(2)　日本においては、死をめぐる哲学的な意味づけや歴史的な分析がそれほど体系立ててなされてきたとは言いがたかった。例えば学術としては、東京大学がグローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」を推進してようやく広範な成果を挙げつつあったが、そこに日本文学や映画を扱う分析的な研究は含まれておらず、先行論をあえて挙げるとすれば、古典を中心に論じた評論として村松剛『死の日本文学史』（新潮社、1975 年）や中西進『日本文学と死』（新典社、1989 年）等があった。

また、一般に、日本人の死生観を心理的に解説した平易な入門書や宗教書が流通してはいたが、近代文学や映画における死の表象の歴史的編成を主題化した学術的な研究は、まだ存在しなかった。

(3)　研究代表者は、本研究に従事する以前に、基盤研究(Ｃ)(H14-15)「日本近代における映像表現と活字文化・文学の重層的な相関を対象とする史的研究」（中山昭彦）および基盤研究(Ｂ)(H20-23)「戦争をめぐる表現と表象－日本近代文学・日本映画に関する中仏との比較研究」（同前）に分担者として参加するとともに、若手研究(Ｂ)(H18-19)「日本近代における文芸及び映像批評言説の比較考察」を代表者として行い、日本近代における文学的・映像的なイメージの編成について、継続的に研究を重ねてきていた。

しかし研究を深めるにつれ、厳密に言えば思考することも表象することも不可能な死こそがまさに、神なき 20 世紀以後における各種イメージの量産を背後で使嗾しており、その様相を可能な限り歴史的に分析記述することをおいて、他に重要な課題はないと考えるにいたった。

２．研究の目的

1970 年代以降、端緒についた死生学は、臨床の場で、またその後様々な分野において思考されるようになってきたが、日本の近代文学及び映画が、ここ 100 年ほどのうちに、どのような死のイメージを生産し、それによって近代社会にいかなる影響を与えてきたのか、およそ十分な研究がなされているとはいいがたかった。

しかし人は、偶然に生まれたそれぞれの時代における科学的・医学的な限界の中で物理的に死ぬのと同時に、あるいはむしろそれ以上に、イメージとして社会に流通する死の表象に囲繞されながら、またそれを知らずに内面化することで、社会的・心理的な意味で死へと追いやられていく。

死のイメージを散漫に消費しながら、実際には己の死そのものからだけは目を逸らして生きるそのような一般的生活態度こそ、近代における死の表象がもたらす避けがたい効果として、知的に分析されるべきではないか。したがって、学際的たるべき死生学に近代を扱う人文科学が本来求められているのは、死をめぐる哲学的な思弁ではなく、あくまでも死の表象がもたらす効果の分析である。

その際、日本近代における死の表象の形成に与って最も重要な役割を果たしたのは、おそらく文学と映画であり、その歴史性を欧米との比較において明らかにすることで、広く今後の死生学に寄与したいと考えた。

３．研究の方法

(1)　死を歴史的に分析することが困難なのは、厳密な意味ではそれが語りえぬものだからである。したがって、死を前にした人間は、経験を超えたものとしてある死を、決して直接には語ることなく、あくまでも死の表象のみについて、迂遠に思考をめぐらせるほかはない。そのため、ややもすると、死の表象を記述することは、本来の意味を欠いた、単なるイメージの羅列に陥りがちである。

例えば研究開始当初、世界的に多くの観客を動員していた映画『おくりびと』では、地方特有の宗教色を帯びた葬儀の様子が、いくぶん下品な誇張を伴って描かれていたが、そこに見られるのはあくまでも、死を彩る風俗の興味本位な詳細と、葬儀社に勤め始めた人間がさも抱くであろう、通俗的な感情や悩みばかりであった。

しかし、そうした種々の風俗を陳列することに、本質的な意味はない。つとにアリエスが指摘するとおり、近代社会において、死は何ら秘められたものではなく、むしろそれはマス・メディアを介して社会的に陳列され、また行政によって統計的に計量され、さらに

は死生学者たち(タナトローグ)によって饒舌に語られることで、学術的にも消費されてきたからである。

そうではなく、例えば学術書とは言いがたい、E・キューブラー＝ロスによる末期がん患者へのインタビュー『死ぬ瞬間』が死生学の先駆けとなったように、否応なく訪れる自らの死を、真実のものとして予感する際にのみ覚えるであろう内的な切迫や、心から愛した者を失う際の絶望的な悲嘆と決定的な喪失を介してのみ、かろうじて死の姿がかいま見られる。であるならば、近代における死をとらえようと試みる際には、死にまつわる文化的な事象の一覧を製作するのではなく、むしろ明日にも死を迎える者の内的な切迫をわがこととして、また二度と癒されることのない絶望的な悲嘆と決定的な喪失においてこそ、死が理解されなければならない。

そのために本研究は、単に死を表象する言語的・映像的なイメージを日本近代や映画から蒐集して一覧を作成しようと試みるのではなく、むしろ各種のイメージがいかに死を語り損ねてきたのか、あるいはどのように死そのものを語ることから目を逸らして、死にまつわる様々な風俗や意匠をゴシップ的に語ってきたのか、その様相を歴史的に捉えようとした。死という語りえないものについて、いわゆる死生学者たちの学術的な饒舌へ陥らずに思考するためには、単純な表象の分析記述ではなく、表象され損ね、語りまちがえられたものの歴史的な分析記述こそが、試みられなければならないのであると考えられた。

(2)　本研究を言語的・映像的なイメージの相関として構想した理由も、そうした主題の困難さによった。文学において死をめぐる個人的な切迫や悲嘆がいかに詳しく書き込まれようとも、その言語的なイメージは物語として社会的に消費されるばかりであるし、また一方で、映像として写しうるのは、決定的な喪失としての死そのものではなく、せいぜいが物理的な死体のみにすぎない。

死を前にしたそのような思考・表象の不可能性を、言語的・映像的イメージの臨界として、互いにつきあわせてみることにより、M・フーコーが指摘したような、視線と言葉の乖離によって編成される近代（『臨床医学の誕生』“Naissance de la clinique”1963、神谷美恵子訳、みすず書房、1969年及び『言葉と物』“Les mots et les choses”1966、渡辺一民他訳、新潮社、1976年等）における死の分析記述が、初めて可能になるのではないか、と予想された。

その際、「表象され損ねた」という語彙からも連想されるように、当然、精神分析的な知が前提とされるべきであるが、研究代表者は早くから、分析的な解釈を踏まえた、言語的・映像的なイメージそれぞれにおける表象の限界について、論考を重ねてきた（城殿智行「大人の玩具―大岡昇平と「歴史記述」の頓挫」、『早稲田文学』2000年7月、同「蝶の採集」、『『明るい部屋』の秘密―ロラン・バルトと写真の彼方へ』青弓社、2008年)。その方法とわずかな成果を、語りえぬ死へと向けて組織することが、本研究の遂行にあたって、必須の作業であると考えられた。

４．研究成果

(1)　まず、一般に流通する死の言語的・映像的なイメージを単に蒐集・分類するのではなく、むしろ死を前にした表象の頓挫、といういわば表象の不可能性を主題にする本研究の理論的な基盤を固めた。

映像分析に関してはスラヴォイ・ジジェク『斜めから見る―大衆文化を通してラカン理論へ』(“Looking Away:An introduction to Jacques Lacan through popular culture”1991、鈴木晶訳、青土社、1995年）及び同『汝の症候を楽しめ―ハリウッド VS ラカン』（“Enjoy Your Symptom!: Jacques Lacan in Hollywood and Out”1992、同前訳、筑摩書房、2001年）が精神分析的な表象の記述を試みながらも、結局分析をすべて思想家ラカンの祖述へと収束させてしまっていたため、本研究においては、そうした分析的な表象記述と、ジャック・デリダ『弔鐘』(“Glas”Galilée,1974)、同『火ここになき灰』(“Feu la cendre”1987、梅木達郎訳、松籟社、2003年）等を始めとするハイデッガー以降の実存主義的な哲学が前提する問いを、照らし合わせた。

さらに、前述のアリエス『図説　死の文化史：ひとは死をどのように生きたか』（“Image de l’homme devant la mort”1983、福井憲彦訳、日本エディタースクール出版部、1990年）のような心性史的記述の死生学における有効性を検証した。実際、自らは映画を研究対象として扱わなかったアリエス自身も、「私たちが想像力を駆使して、あらゆる図像をモンタージュして重ねてやれば、死をめぐる諸々の歴史的文化に関する一連の映画のようなイメージをうまく作ることができるかもしれず、それこそが望みである」と語っており、死のイメージを分析した数少ない規範となる、映画以前の図像を対象にしたアリエスの歴史記述が、美術史の領域におけるパノフスキー的なイコノロジーの限界を超えて、表象されえぬ死に対し、どこまで有効であるのかを、アリエスが欧州及び合衆国で調査した膨大な資料に照らして、今一度厳密に検証されるべきであると考えられた。

(2)　死の表象を書き込もうとした（あるいはそれを抑圧／排除した）近代文学作品の特徴的な要素を分析するとともに、自己及び近親者の死をめぐる危機的な経験の有無等を中心にして、諸作家の年譜を洗い直し、実人生の反映を作品に認める素朴な作家論とはまったく異なる意味で、作品と年譜的な事実

とをつきあわせ、むしろそこに決定的な経験の語り損ねを認め、語りえぬものとしての死を析出させようと試みた。
　その過程で、論文としては、言語的・視覚的なイメージ形成の臨界を探ることで、死の表象を逆説的に照射する、という本研究の意図に沿い、現実と幻想の境を「異界」として描きつづけた泉鏡花の作品と、鏡花の作品こそがまさに映画的であるのだと指摘して憚らなかった谷崎潤一郎及び溝口健二の錯綜した関係をとりあげ、言語的・視覚的な表象の編成期における、文学と映画の複雑な相互作用を的確に腑分けし、物語言説の範型が整えられていくに従い、語りえぬものがどのような位相に析出されていくのかを明らかにした。

(3)　映画においては、例えばナチスによるユダヤ人絶滅政策（いわゆるホロコースト）を半ば意図的に写し損ねることで、語りえぬ死を主題化したクロード・ランズマン監督の映画『ショア』（1985 年）及びショシャナ・フェルマン『声の回帰―映画『ショア』と「証言」の時代』（“Film as Witness: Claude Lanzmann's Shoah” in Geoffrey H. Hartman(ed.)“Holocaust Remembrance: The Shapes of Memory”1994、上野成利他訳、太田出版、1995 年）が証したように、映像における死の表象にも、いくつかの大きな歴史的切断が認められた。前述のように、アリエスは『叫びとささやき』のみに触れて、死を主題にした映画を分析する必要性について語っていたが、実際には、ベルイマンの『第七の封印』（1956 年）や『野いちご』（1957 年）及び黒澤明の『生きる』（1952 年）等に代表されるような古典的映画における死の表象から、現代の映画は遠ざかり、別種のイメージを生産しているのだと考えるべきであった。「映画が垣間見せてくれる新しい象徴思考が、現代的な虚無の観念をめぐって形成されつつあるように思われる」と前掲書を結んでいたアリエスの、表象分析における(未然の)可能性を、映画が支配的な大衆文化となった 20 世紀の文学や文化に、接合する必要があったのである。そのため、欧米諸国の映画と対比させながら、各時代における日本映画の分析をすすめた。
　その過程で、論文としては、早くから日本的な様式美を代表する存在として西欧で高く評価され、近年では英米系の研究者から、直接的な描写の組織的な回避を世界的にも稀な特質として指摘されてきた溝口健二の諸作をあらためて詳細に分析し、ロング・テイク、ロング・ショット、ディープ・フォーカス等を独自の意味で用いる溝口の演出が、単純に西欧的な映像文法の規範を否定するものではなく、むしろ「死」を始めとする映像によっては表象しえぬ出来事や力をいかに画面において表現しうるか、という試みの一環であったことを論証した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①城殿　智行、折鶴の行方　―溝口健二と「深さ」の変容（二）、大妻女子大学紀要―文系―、査読無、46 号、2014、109―136

②城殿　智行、折鶴はなぜ落ちたのか？　―溝口健二と「深さ」の変容（一）、大妻女子大学紀要―文系―、査読無、45 号、2013、95―108
http://ci.nii.ac.jp/lognavi?name=nels&lang=jp&type=pdf&id=ART0010002944

③城殿　智行、消された眉　―泉鏡花と溝口健二の「映画的」文体、大妻国文、査読無、44 号、2013、107―126

〔図書〕（計１件）

①城殿　智行他、河出書房新社、吉田健一生誕 100 年　最後の文士、2012、192（165―184）

６．研究組織

(1)研究代表者
城殿　智行（KIDONO, Tomoyuki）
大妻女子大学短期大学部・国文科・准教授
研究者番号：００３４１９２５